資料１

これまでの検討協議会での主な意見について（論点整理）

青字は第１回，赤字は第２回

（市立幼稚園をとりまく環境とその変化について）

・国の動向を見てみると，保育所を中心とする整備に注力してきており，私立幼稚園は園児がいなければ潰れるという厳しい環境に置かれてきたため，それを防ぐために必死に先々を読んで自らを変えてきた。

・新制度になったから公私のバランスが崩れたわけではなく，函館市内では従来の私立幼稚園就園奨励費補助制度のなかで私立が保育料を高く設定しなかったので，公私の差はほとんどなくなってきていた。

（市立幼稚園の今後の方向付けや存廃について）

・函館市では，昨年１，６００人ほどしか子供が生まれなかったということから，今存在する幼稚園・保育所で分配すると考えれば，公立の保育所と同じように，廃園にするならするという方向付けをしていかなければならない。

・子どもを集団で育てるという点では，５，６人といった人数でいいのかという話になると難しいところがある。ただし，戸井幼稚園については，地域性・公益性といった点からも考えなければならないのではないか。

・保護者のニーズとしては，預かり，送迎，給食といったサービスにあるが，市立はそれができてこなかった。市立を存続したいのであれば，この状態を私立と同じレベルにしなければならないが，それができないのであれば，結果は見えている。

・市内には私立幼稚園が多く，代替施設として十分機能する。戸井幼稚園についても，湯川方面の幼稚園の状況から，バスを走らせれば十分機能すると思う。園児数もかなり少なくなっており，これを存続させる意味があるのか疑問。

・市立幼稚園の現在の園児数の状況は，大きな施設を維持していくなかで，維持費等もかさむことから，民間であれば経営が成り立たない。

・子ども・子育て支援事業計画の理念を追求できるのは認定こども園であり，幼児教育のみの市立幼稚園に使命はもうないのではないか。いったん，閉園させ，幼児教育全般を含めた施策の中で必要性が生じたときに，認定こども園という形で復活させて，市の幼児教育のリーダーシップを担う施設として再出発するという考え方もあるのではないか。

・はこだて幼稚園の向かい側にも認定こども園がある。同じ幼児教育を担う施設が２つもある必要性は感じられなく，はこだて幼稚園は廃園を目指すべきではないか。

・函館市幼稚園・こども園協会や北海道国公立幼稚園・こども園協会，幼小連携や教育実習に関して，はこだて幼稚園が果たしてきた役割は大きい。廃園に伴い，これらの部分がどうなっていくのかという課題もある。各種協会の役割については，私立幼稚園側も分担してもらうことができる土壌があれば，クリアできるのではないか。

・教育実習や研究については，私立幼稚園でも担うことができるのではないか。

・はこだて幼稚園と戸井幼稚園を統合という形（はこだて戸井幼稚園なども名称も）も考えられるのではないか。統合し，児童数の推移など見極めるという方法も一つの案とできるのではないか。ただ，統合という形にする場合は，どういう使命なり，役割を戸井幼稚園に課すべきなのか議論が必要となるだろう。

・学級単位で少人数であると，子どもにとって人との関わりが狭まる。子どもの人数に対する先生の割合が高いところを親は望みがちだが，小学校に入学したときのスムーズな友達づくりなどを考えると，学級単位で少人数である園より規模が大きい園の方が子どもの成長にとってはよいのではないか。

（函館市の幼児教育のあり方について）

・今の保護者の目は，サービスに行きがちだが，小学校に上がるまでの発達段階に応じた必要な教育・保育というものは普遍的で変わってはいない，その中で函館の幼児教育をどうしていくべきか関心をもつべき。

・一度なくしてしまうと再度設置するのは難しい。市はこの後幼稚園をなくしていって子育て支援をどのように考えるのか，将来の函館を担う子どもたちをどう育てるのか，慎重に検討し，考えておかなければならない。

・幼小連携については，先進的事例もあるので，教育委員会等が中心となって，保育所も含めて小学校に入学する子ども全員を対象として進めていかなければいけないのではないか。